コレクション展
絵画はつづく、今日にむかって

芦屋市立美術博物館開館 30 周年記念　　コレクション展　「絵画はつづく、今日にむかって」

会　　期	2021 年 9 月 18 日（土）－ 11 月 21 日（日）
開館時間	10：00－17：00（入館は 16：30 まで）
会　　場	芦屋市立美術博物館　第 1、2 展示室、エントランスホール
休 館 日	月曜日（ただし、9 月 20 日は開館、翌 9 月 21 日は休館）
観 覧 料	一般 500（400）円、大高生 300（240）円、中学生以下無料 ※同時開催「芦屋の歴史と文化財」展の観覧料も含む ※10 月 17 日（日）と 11 月 3 日（水・祝）は無料観覧日 ※(　)内は 20 名以上の団体料金 ※高齢者(65 歳以上)および身体障がい者手帳・精神障がい者保健福祉手帳・療育手帳をお持ちの方ならびにその介護の方は各当日料金の半額になります。
主　　催	芦屋市立美術博物館
後　　援	兵庫県、兵庫県教育委員会、公益財団法人兵庫県芸術文化協会、神戸新聞社 ＮＨＫ神戸放送局、Kiss FM KOBE

「絵画はつづく、今日にむかって」

絵画は今日まで続いてきました。
何度もその終焉をささやかれても、
美術の主要ジャンルであり続けています。
それは、１人ひとりの画家がただ描いてきたことによって。
ただ描いた、１枚１枚の絵によって、
今日まで続いてきたのです。

今日を生きる私たち。
絵の前に立てば、作品と格闘する画家の当時の「今」と、
鑑賞する私たちの「今」が、重なります。
作品が伝える、画家たちの真摯な探求の姿は、
今日を生きる１人ひとりの私たちを、力づけてくれます。

開催趣旨

美術作品には、作者の思考が刻み込まれています。絵画であれば画家１人ひとりが「何を」「どう」描くか、そして「何がよい絵なのか」という問いを持ち、これに対して出したひとつの答えが作品なのです。本展では、当館のコレクションの中から絵画作品に焦点をあて、「モチーフ」という視点からその実像に迫ります。

「モチーフ」とは風景や人物のモデルなど、絵に描かれる「対象」を指しますが、そのほか制作の「動機」、作品の「主題」や「構成要素、構成単位」という意味ももちます。抽象的な絵にも、画家がその絵で目指したモチーフが必ずあります。モチーフに迫ることは、画家の設定した絵についての問いと答えに迫ることにつながります。絵画の問題に真摯に向き合う画家の姿は、先の見えない困難のなかにいる現代の私たちにも、前向きな気持ちを与えてくれるのではないでしょうか。

1．山田正亮《Work C-75》1960 年　油彩、布

展覧会の特徴・見どころ

1．　ひたすらに**絵画だけ**に向き合う展覧会！当館のコレクション**約 1470 点**の中から選りすぐった絵画作品**約 80 点**を展示。

2．　若き日の画家が観察眼と描写力を鍛えた**デッサン**や**スケッチ**、作品の**下絵**なども展示。
描くことを多角的にとらえます。

3．　**絵画を見るポイント**、**着眼点**を紹介する、**鑑賞の手引き**を作成します。今回の展覧会以外にも応用できる絵画のみかたです。ほかにも以下のような情報を紹介します。

・絵画とは何か？その存在をめぐるキーワード

絵画の営みをときに支え、ときに脅かしてきた、絵画にまつわる **10 個**の**キーワード**によって、**絵画の問題**を概観します。

描くことと塗ること/色彩/支持体/奥行きと空間/行為と痕跡/時間…

・画家たちの生きた言葉

なぜそのモチーフを選んだのか、それによって何を実現したかったのか―。**制作ノート**や**エッセイ**などさまざまな資料も参照しながら、自身の制作に関する画家たちの言葉を紹介します。

会期中こんなことやります！

1．会期中、様々な**イベント**を実施します！美術史の知識によらず**造形的な観点**から絵画を読みとく講演会や、様々なレベルでの「描くこと」を体感する**ワークショップ**。
ギャラリートークでは学芸員と参加者のみなさんで**対話**しながら絵を見ていきます。
大人の方からお子さんまで、お気軽にご参加ください。
※新型コロナウイルス感染症の状況により、イベント内容の変更または中止となる場合がございます。

2．**Twitter** にて、作品や展覧会について紹介していきます！企画者でありながら１人の熱心な**絵画ファン**である担当学芸員の、いち鑑賞者としての視点での投稿です。
できるだけ毎日更新できるように頑張ります！

出品作家（予定）

青山洋子/蟻田哲/飯島一次/伊藤継郎/上前智祐/浮田要三/江見佳彦/大植基正/大橋エレナ/大橋了介
小野田實/片岡真太郎/金山明/川崎ヒロ子/菅野聖子/木梨アイネ/国枝金三/黒田重太郎/小磯良平
小出卓二/小出楢重/坂本昌也/嶋本昭三/白髪一雄/菅井汲/関根美夫/田井智/田中敦子/田中竜児
田村孝之介/津田青楓/津高和一/坪内晃幸/仲田好江/名坂有子/鍋井克之/長谷川三郎/藤井二郎
古家新/正延正俊/松井正/松谷武判/村井正誠/村上三郎/元永定正/山崎隆夫/山崎つる子/山田正亮
吉田喜蔵/吉田稔郎/ヨシダミノル/吉原治良

出品作品数（予定）

約 80 点

展覧会構成

プロローグ　絵画の成り立ち

絵画を成り立たせているものは何でしょう。

絵を見てまず知覚されるのは、何が描いてあるか（＝**イメージ**）、そしてそれを構成している**色彩**や**線**です。物質的には、**紙**や**カンバス**といった**支持体**の上に**絵の具**がのってできています。絵の具の表情を見つめてみると、ここに閉じこめられた色彩は実にさまざまな表情で輝いていることがわかります。

また絵の具や支持体は、絵画の本質についてのキーワードにも関係しながら、これまで美術史のなかで語られてきました。展覧会のプロローグとして、絵画の物質的な側面に注目し、絵の具や支持体の様子がさまざまな作品とともに、絵画の存在をめぐる 10 個のキーワードを紹介します。

2. 吉原治良《静物（仮題）》1926 年頃　油彩、板

3. 川崎ヒロ子《WORK '93K Ⅰ》1993 年　油彩、布

第１章　描きとめる　―眼の欲望と手の仕事

画家はそれぞれのモチーフを世界から選び取ります。ありふれた日常に着眼し、描くに足るモチーフとしてしまう、画家のまなざし。ふとした子どもの表情や動物の躍動感、自然のきらめきに言いようもなく引きつけられ、一瞬の表情や動きを何かに留めておきたいと思うことは、私たちにも共感できるのではないでしょうか。いわば、眼の欲望です。

そして、モチーフを眼と手で確かめながら画面に描いていく筆跡には、モチーフに対する愛情や、画家としてのひたむきな熱意がこもります。画家の手の仕事を通して画面に現れるモチーフは、現実のたたずまいのうえに絵画としての味わいをまとって、絵画ならではのイメージとしてあらわれます。

4. 伊藤継郎《闘牛》1970 年頃
水彩、パステル、方解末、紙

5. 吉田喜蔵《芦屋の山より》1937 年　パステル、紙

第２章　絵をつくる ―モチーフの操作と構成

画家たちはモチーフを絵にするとき、画面にどう収めるか、を考えます。バランスよく画面に収めるための構図にとどまらず、線や色彩を意識的に調整し、省略したり強調したりしていく画家の絵づくりには、描写から離れることになっても、絵としての生命力を探求していく意思がこもります。

このように意識的な絵づくりを推し進めていくと、次第にそれとわかる具体的なモチーフが解体され、画面は純粋な色彩や線、形によって構成されていきます。「何を描くか」から「どう描くか」という問題への移行です。

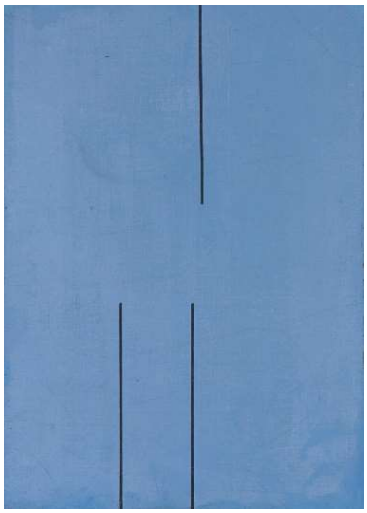
6. 長谷川三郎《赤の静物》1934 年　油彩、布

7.　小出卓二《渡船場》1942 年　油彩、布

第３章　描くことへ　―せめぎあうモチーフとイメージ

モチーフの再現から自立した色彩や線は、それ自体が、画家が画面にはたらきかける手立てとなり、画面の**構成要素**としての抽象的なモチーフ、また画家の**動機**という意味でのモチーフとなります。あるルールや秩序のもとで画面を構成する色彩や線は、やがて画家の描く行為の痕跡そのものとなり、また極限まで要素がそぎ落とされた画面の中に静かにたたずむようになりました。一方で、従来の具体的なモチーフは完全に消失することはなく、具象と抽象のあいまを円環する、絵画の営みが現在まで継続しています。

画家たちが試行錯誤によってカンバスに立ち上げてきた絵画的なイメージは、見る者の多様な見かたを受けとめる強さをそなえています。今日の私たちは、絵画を通して画家のまなざしを追体験するだけでなく、ときに個人的な心象を投影しつつ、自分に引きよせて見ることで、絵画とのゆたかな交流の時間を体感できるのです。



8. 金山明《WORK》1954 年　油彩、布

9. 吉原治良《作品》1960 年　油彩、布

10. 山崎つる子《作品》1964 年
ラッカー、布

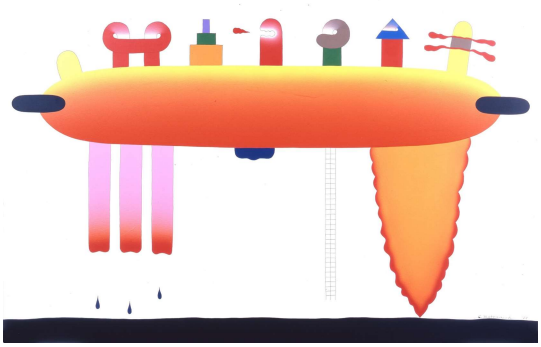
11. 松谷武判《作品・62》1962 年　樹脂系接着剤、合成樹脂系絵具、布

関連イベント

※新型コロナウイルス感染症の状況により、イベント内容の変更または中止となる場合がございます。
　詳細は当館ホームページにてご確認ください。

（1）講演会「絵画のみかた ―フォーマリズム入門」

講　師　川田都樹子（美術批評家）
日　時　10 月 2 日（土）13:00-15:00
※終了後、展示室にて講師立ち合いのもと自由鑑賞
会　場　当館　講義室
参加費　無料（要観覧券）
定　員　60 名（予定）申込不要
直接会場にお越しください
内　容　フォーマリズムとは、絵画を見る手法のひとつです。何が描かれているかではなく、画面上の色や形、絵の具の様子などの造形的な観点によって、絵画を見ていきます。鑑賞者みずから積極的に作品の魅力に切りこんでいく、絵画のみかたをご紹介します。



12. 元永定正《うえのかたちはななつ》
1988 年　アクリル、布

（2）ワークショップ「動きを描く ―ダンシング×クロッキー」

講　師　ナビゲーター/岸本恵美子（画家）
ダンサー/伊藤愛
音楽/稲田誠（コントラバス奏者）
日　時　10 月 9 日（土）16:30-19:00
会　場　当館　エントランスホール
参加費　無料（要観覧券）
対　象　高校生以上
定　員　20 名
＊要事前申込、9 月 25 日（土）締切
内　容　クロッキーとは短い時間ですばやく対象を描いていくこと。今回はダンサーさんが躍る様子をクロッキーします。無心で手を動かす楽しさや、自分の意図をこえて画面に現れる線の面白さを味わいます。

過去の実施風景、2018 年
（岸本恵美子個展、ギャラリー風）

（3）学芸員によるワークショップ

①　「絵の具とあそぶ―抽象画に挑戦」
②　「美術館の絵画教室―りんごがひとつ」

日　時　①10 月 23 日（土）
②11 月 7 日（日）
いずれも 13：00-15：00
会　場　当館　体験学習室
参加費　無料（要観覧券）
対　象　小学生以上
定　員　20 名　＊要事前申込　①10 月 9 日（土）、②10 月 24 日（日）　締切
内　容　①様々な画材と技法を使いた抽象的な絵作りを体験します。
②りんごというひとつのモチーフを、様々な画材と技法で描写することを体験します。

（4）　学芸員とギャラリートーク

日　時　9 月 26 日（日）、10 月 17 日（日）、10 月 30 日（土）、11 月 3 日（水・祝）
いずれも 14:00-15:00
会　場　当館　展示室
参加費　無料（要観覧券）
対　象　どなたでも　申込不要、直接会場にお越しください

◎申込方法
芦屋市立美術博物館へお電話（0797-38-5432）かメール（ashiya-bihaku@shopro.co.jp）にて、イベント名、お名前、人数、ご住所、ご連絡先をお伝えください。応募者多数の場合は抽選となります。

【お問い合わせ】　芦屋市立美術博物館
〒659-0052　兵庫県芦屋市伊勢町 12-25　FAX：0797-38-5434
◆企画内容に関して
担当学芸員　川原百合恵　TEL：0797-23-2666（学芸直通）
◆画像貸出等、広報について
総務課　TEL：0797-38-5432（代表）
◇ホームページ：https://ashiya-museum.jp
◇Facebook：芦屋市立美術博物館
◇Twitter：@ashiyabihaku